



私はいま、夢を見ているのだろうか。

次々と懐かしい記憶がよみがえる。

「お母さん、お母さん」

幼い私が、そう言って母に抱きついて泣いている。

そうだ。私は泣き虫だったんだ。幼稚園ではよく友達に泣かされていた。

でも、その度に母は私の頭をさすりながら歌うように言っていた。

「コウちゃん、泣かないの。男の子でしょ。はい、笑って、笑って」

場面が変わる。

夕飯時だ。私は高校生になっていた。

母と向かい合って、黙ったまま二人でご飯を食べている。そして、私はおかずを半分残したまま部屋を出ようとする。

「孝一、ちゃんと残さず全部食べなさい」

「いいよ、別に。それより勉強するから、声かけないでよ」

嘘だ。勉強なんて。本当は母と二人でいるのが嫌だったんだ。そう言えば、あの頃は母と会話しただけの記憶がほとんどない。

私が部屋を出た後、母は私が残したおかずの皿にラップをかけていた。

その時の母の顔は、なんだかとても寂しそうで、悲しそうでもあった。

「まあ、難しい年頃だもんな。でも、ごちそうさま、くらい言ってやれよ」

いま目の前にあの頃の私がいたら、そう笑いながら言って、一発、思いっきり、ぶん殴ってやる。

また場面が変わる。

「いい人そうじゃない。お母さん安心したわ」

「じゃあ、おふくろは賛成なの？」

「もちろん。あとは、孝一が美紀さんのご両親にどう思われるか次第よ」

思い出した。これは、妻の美紀を初めて母と合わせた日の夜の出来事だ。

「ありがと、おふくろ」

「なに言ってんの。孝一が選んだ人なんだから間違いないわ」

「いや、そうじゃなくて」

「え？」

「いままで育ててくれてありがとう、ってこと」

母はぷっと吹き出した。

「やだねえ、それはお嫁に行く人が言うセリフだよ」

「いや、でも、おふくろには迷惑ばかりかけてきたから。これからはいろいろ頼ってくれていい

から」

母は、今度は一呼吸置いてから、ふふっと笑った。

「孝一、あんた、お母さんを勝手に年寄り扱いしないでくれる？まだまだ元気なんだから。あなたは美紀さんとのこれからを考えてればいいの」

「いや、それはそうなんだけどさ・・・」

不意に母が立ち上がり、台所に向かう。

「あー、夕飯の中華料理、緊張して全然喉通らなかったから、お腹空いちゃった」

そう言って母は冷蔵庫を開けた。

「リンゴあるけど、孝一も食べる？」

「いや、いいよ」

「あっそ。じゃあ、今日は孝一も疲れただろうから、さっさとお風呂にでも入っちゃいなさい」

母は蛇口をひねる。リンゴを洗う。また蛇口をひねる。水がさっきより強く噴き出した。

それでも、母はリンゴを洗う、洗う、洗う。やがて、水の音に紛れて小さな嗚咽が聞こえてきた。

私は聞こえないふりをして立ち上がり、もう一度「ありがとう、おふくろ」とだけ言って部屋を出た。

目が覚めた。

部屋には消毒液の匂いが満ちている。ここは病院の個室だ。

目の前には、チューブに繋がれた母が昏々と眠っている。「今夜は覚悟しておくように」と、さっき母の担当医に言われた。

母一人、子一人だった。物心ついてから、ずっと。

私は母の手をさすりながら、子どもに戻ったみたいにわんわん泣く。

「お母さん、ありがとう・・・今まで本当に、ありがとね」

「もう・・・いいよね。充分、頑張ったもんね。ゆっくり・・・休もうね」

「僕・・・ぼく・・・お母さんの子どもで・・・本当に良かったよ」

母の息を伝える機会の規則的な音が聞こえる。

シューツ、シューツ、シューツ――。

やがてそれは、私を呼ぶ母の声に変わった。

コウちゃん、コウちゃん、コウちゃん――。

私はわんわん泣く。

「コウちゃん、泣かないの。男の子でしょ。はい、笑って、笑って」

懐かしい声が、聞こえるはずがないのに聞こえた。

(完)

